

「菟玖波

本書は、

作品と風体

とがあり、

序章では

宛を概観し

いている。

たことを扱

代、後宇多

の連歌をと

朝連歌の基

し、賦物連

第二編菟

関係のある

点を置いていないらしく、作品と風体の部分
文芸的価値の問題は後年の発達した段階に関
であると思われるので、やむを得ないと見ら
本書の目的とするところは金子君が序章で
実の追求に全力を挙げるという点にあり、そ

